

始



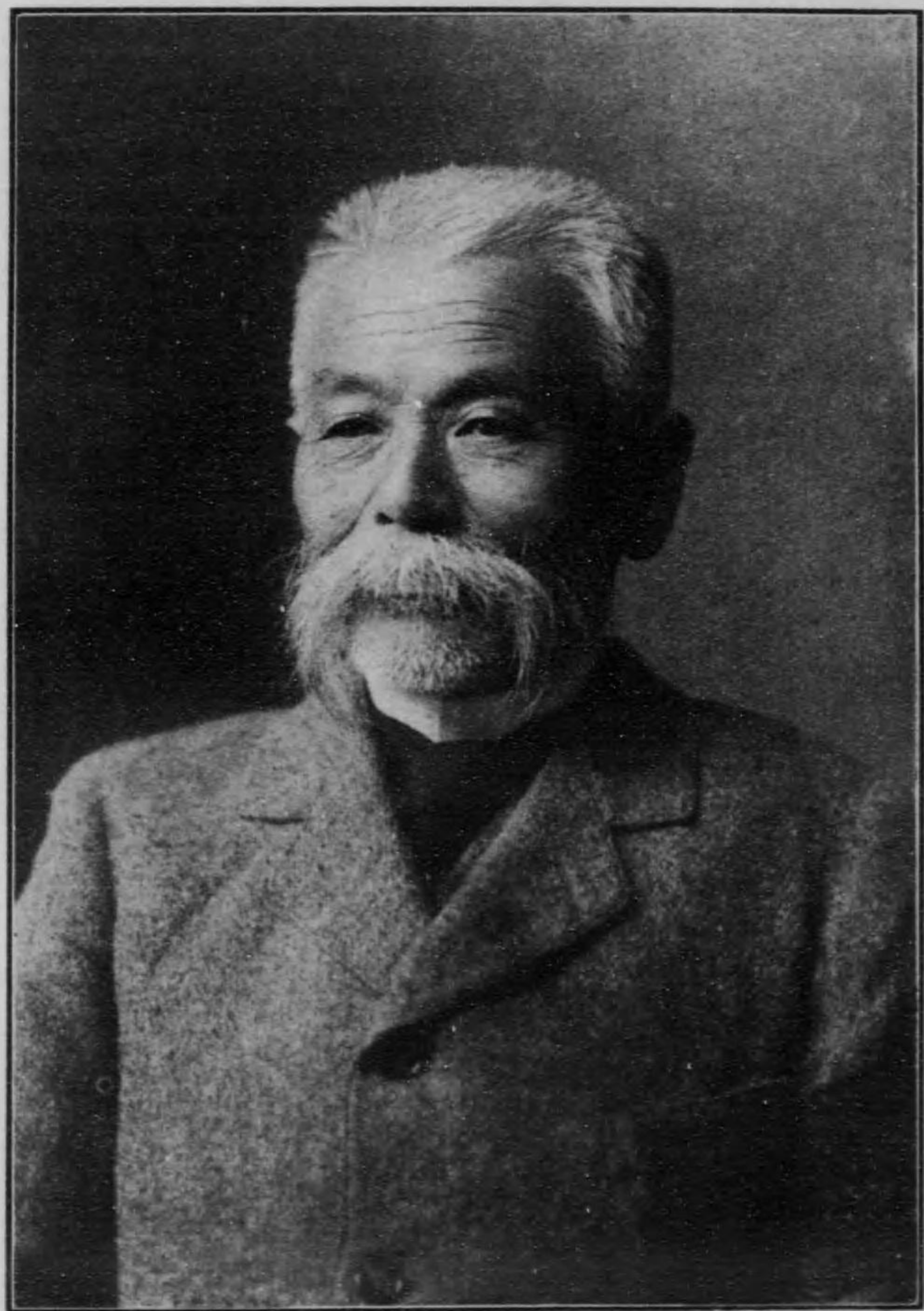
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

11
593

男爵前田正名君略傳

和

男爵前田正名君略傳



君名正田前爵男

11-593



強國論
之
史

五成仲夏

是清題

大正
11. 9. 11
内交

小 引

明治維新に方り、薩南の地鬱然として多士輩出す。即ち文に甲東、武に南洲、財政に海東、而して産業には實に吾が前田氏正名君あり。前田君は余が同郷の先輩、夙に産業立國の必要を先覺し、大策を樹立して之が實行に殉じ、國本の培養を以て一代の使命とせり。君や洵に吾が産業界の大恩人、其奮闘の生涯は後昆の龜鑑とすべきものあり。若し夫れ甲東、南洲、海東の偉績の如きは、事政治に關するを以て直ちに青史に録載せらる。獨り吾が前田君の努力に至りては事多く幽明に屬し、畢生の奮闘も其奏功成果は期するに百年を以てするの要あり、獻芹の微誠、或は世に忘れられんとす。余之を憾み、小閑に乗じて茲に聊か君の略傳を敘す。君が饒衍の閱歷は到底小冊子の盡す所にあらず

唯一班を傳へて全豹を窺ふの一助たらしめば足るのみ。乃ち
敢て之を知友諸賢に頌ち、以て故人敬慕の至情を寓せんとす。
大正十一年七月

愛 甲 兼 達

目 次

- 一、男爵前田正名君寫真 卷 頭
一、子爵高橋是清君題辭 同 同
一、小 引 同 同
一、男爵前田正名君事蹟概略 一 頁

生立——長崎留學——薩摩辭書の編纂と洋行準備——佛國留學——萬國博覽會參加計畫——
三田育種場創設——勸業提唱——博覽會に於ける日本の成功——貿易振興策唱導——國業經
營——市町村是の創唱——産業開發——産業調査——開田疏水事業——官歴——授爵

一、附 録

記念碑設計畫——追悼會次第

二 一 頁

男爵前田正名君事蹟概略

生立 故前田正名男は舊薩藩の士前田善安氏の二男にして、弘化三年三月鹿兒島城下に生まる。幼より草木を愛培し殖産に興味を有す。九歳の時八木昌平氏の門に入り洋學を修む。時の藩主島津齊彬公夙に外國貿易の必要を認め、琉球及大島に於て密に外人と交易し、其折衝の任は男の師たる八木氏等専ら之に當りしを以て、當時の密書其他重要な事件の使者は多く之を男に命じたりと云ふ。斯くて男は早くも外國貿易の事情に通じ、又當時天下は尊王攘夷の論喧しく志士四方に奔走する際なりしを以て、此間に成長せし男は自然に尊王愛國の精神を涵養し、更に國家百年の長計を察して大に外國の事情に精通するの必要を感じ、外遊の念禁じ難きものありしも、時尚鎖國の

時代に於て如何ともする能はず、十六歳の時遂に意を決して藩主に建白し、殖産興業の意見を開陳して海外留學の許可を與へられんことを請へり。藩主男の意氣を壯として先づ長崎留學を命じ、特に中原猶介の指揮に従ふべきことを指定せり。

長崎留學

當時開港場は僅に横濱、長崎の二港に過ぎず。而して諸藩の武器其他新時代の必要品を購入せんとするもの皆長崎に集まり、多くは薩藩の外國係に依りて其用務を辨ずるを例とせり。而して中原猶介氏は五代才助氏と共に其人物力量群を抜き、薩藩に在りては西郷、大久保兩氏の次に位すべき程の大人物なるが故に、共に藩主齊彬公の信任を得て長崎に外國係たりき。男の長崎遊學中は國論の沸騰甚しく、四方の豪傑此地に集まり或は自藩の軍器購入に奔走し、或は尊王倒幕の目的を達せんが爲め各藩の合縱を企畫するものある等、長崎は宛然日本

の縮圖たるが如き觀あり。坂本龍馬、佐々木高行、後藤象次郎、佐野常民、副島種臣、大隈八太郎等の志士亦此地に集合して諸藩の氣脈を通ずること力に致し、又長州の名流にして幕府の嫌疑を避けんが爲め薩人を稱して此地に來往せる者も尠からず。男此間に處して謂へらく、机上の勉學に没頭せんよりは寧ろ見聞を廣めて實情に通曉するに如かずと、乃ち日夕志士雋傑と交遊して大に爲すあらんことを期せり。後薩長聯合の議決し、薩藩より密使を長州に派遣せらるゝや男亦請うて其一行に加はり幾度か危地に入して使命を全うし、再び長崎に歸れり。初め男の長崎を發するや坂本龍馬、男の帶刀長きに失するを見て自身の佩刀を取りて之を男に帶せしめたりと云ふ。男が年少にして先輩豪傑に交り、其愛撫を受けたるの狀之を以て推知す可し。

薩摩辭書の編纂と洋行準備

男は外國渡航の事夢寐尙之を忘るゝ能はず、而も洋行の目的を達せんには先づ以て費用の調達を要することを悟り、故高橋新吉男及男の實兄故前田獻吉氏と相謀り、英和辭書一卷を編纂し、男自ら稿本を携へて密に上海に渡航し、之を印刷に附し、成本二千部を携へて歸朝せり。是れ所謂薩摩辭書なり。明治初年より十有餘年間、苟も英語を學ぶ者は薩摩辭書を指針とせざるものなく、學生にして薩摩辭書の名を知らざる者なかりしは、嗚々を要せざる所なり。偶々御備佛人コント、モンブランの歸國するあり、明治元年十二月、男は外國官よりモンブランに隨行佛國派出を命ぜらる。實に明治政府最初の海外派出者なり。男は多年の宿望茲に達せられ、胸中の愉快譬ふるに物なく、踴躍して征西の途に上れり。時に年齒二十一歳、男の得意想ふ可し。

佛國留學

横濱を發してより香港、柴昆、錫蘭島、亞丁に寄港し、蘇士より陸行佛人レセツプス氏の運河工事を觀つゝアレキサンドリヤに至り、更に地中海航行の汽船に便乘して佛國マルセイユに上陸し、次で巴里に着せり。途中幾度か文明的設備の完整と規模の洪大なるに駭目し、其佛都巴里に着するや更に都市設備の完全雄大巧妙なるに驚嘆し、到底企及すべからざるを感ぜり。在留一年、偶々彼の普佛戰爭の勃發するあり、男は義勇兵となり、劍を提げて軍に従ひ、巴里に籠城すること一年、備に辛酸を嘗む。而も其間軍隊の組織、武器の整頓、市民に對する食糧配給の方法、其他一般秩序の井然たる等敬服に堪へざるものあるを認むると同時に、西歐の文明には表裏あることを看破し、決して吾人の企及し難きものにあらざることを確信するに至れりと云ふ。男は在學五年餘にして外務二等書記生に任ぜられ

佛國公使館に在勤せり。

萬國博覽會參加計畫 西曆千八百七十五年佛國政府は戰敗後の國威を恢復せんが爲め、巴里に萬國博覽會を開催せんことを企て之が計畫を發表せり。男謂へらく、今次の佛國大博覽會は我が農工商の爲めに發展の機會を與ふるものにして、此好機を失はば果して何れの日をか待たんや、然れば此博覽會は普通の博覽會と同一視せず、須く日本商品の店開きとして皆奮つて出品すべきなり。斯くて佛蘭西、英吉利に日本商店を設け直接貿易を開始し、横濱、長崎及神戸の商權を我が掌中に收むるにあらざれば、斷じて外國貿易の利益を享受し且我が商業上の知識を進歩せしむること能はずと。偶佛國滯留中の故井上侯亦男の意見に賛同せしを以て、男は敢然決意之を當路に建議す可く歸朝の途に上れり。海路香港に寄航し初めて西南戰亂の事件

を耳にし驚愕と悲痛とに襲はれたり。次で乗船は横濱埠頭に投錨し、一步上陸すれば見るもの珍奇ならざるはなく、殆ど別世界の感あり。電信柱、巡查、斷髮、着帽、着袴、學校、郵便局等、皆初見參なりしも、就中最も喫驚せるは人力車なりしと云ふ。

三田育種場創設 當時國內は西南戰爭の爲め兵馬倥傯混亂名狀すべからざりしも、大久保内務卿、大隈大藏卿、松方大藏大輔兼勸業寮長の三公を始め皆熱心に男の歸朝を歓迎し、其持説たる博覽會參加の事、育種場の設立、直接貿易の事等一として聽かれざるなく、策一として用ひられざるなし。初め男の佛國を發して歸朝の途に上るや歐洲滞在九年の國恩に報ぜんが爲め其土産として國家有用の物品を選択せんとし、穀物、蔬菜、果樹、花卉、其他良材の種子、種苗を蒐集して之を持歸れり。而して是等種苗は取敢へず假に新宿御苑に植付け、後、芝三田舊薩摩屋敷に數

十町歩の荒蕪地を開墾し之に移植して三田育種場と稱せり。蓋し大久保卿の自ら命名せし所なりしと云ふ。而して育種場は分ちて四區とし第一區は外國に輸出する植物、第二區は外國より輸入する植物、第三區は試験地、第四區は畜産牛馬羊豚の飼養場とし、又初めて競馬をも開始せり。其後故ありて三田育種場は民間に拂下げられたるも、此種施設の必要は朝野の認むる所となり間もなく全國に普及し、今や農事園藝畜産等の試験場は各府縣之を設けざるものなし。

勸業提唱

男が育種場長に任ぜられたるは明治九年なり。次いで勸業寮御用掛となり、勸農局に出仕し、傍萬國博覽會事務官として出品準備に従ひ、又三井物産會社につきて博覽會出品物の手配支店設置の計畫等を指導援助する等、殆ど夜を以て日に繼ぎたり。又當時大蠶に供奉して京都滞在中なりし大久保

卿は羽書旁午劇務蝟集の際にも拘らず常に勸業に耳を傾け男を帶同して京都の工藝品を巡視せりと云ふ。

博覽會に於ける日本の成功

斯くて明治十年十月迄に一切の準備を了り、先發事務官として再び渡佛し、着後直に陳列準備に着手し、開會式前一切の陳列を完了せり。蓋し開會式前出品物の出揃ひしは我日本ありしのみにして、又大統領マクマホン氏が全出品物を觀覽せしは獨り我が日本品のみなりしと云ふ。是れ専ら男が奮勵努力の結果に外ならず。男は又會期中出品物の利用方法を紹介すること、是等販路の擴張とに最善の努力を拂ひ、或は日本風の庭園を築き、或は國劇忠臣藏を上演し、我が風俗歴史文化を紹介して好評を博せり。爾來帝國が海外博覽會に参加出品せしこと枚擧に遑あらずと雖も、其の將來の貿易を開發し、我が風俗歴史を海外に知らしめ、全體に於て豫期以

上の好結果を齎したるものは、恐らく明治十一年の佛國大博覽會を措いて他に其比儔を見出し得ざる可し。

貿易振興策唱導 明治十二年男の佛國より歸るや直輸出貿易意見書を草して當路に呈し、尋て其一班を世に公にし大に貿易上の得失を論ぜり。蓋し當時我國の貿易は生産者直接に海外の取引を爲す能はず爲めに海外需要者の實状を知る能はざりしを以て、商權は仲介者たる外人の手に委ねられ、商品の信用を鞏固にし其改良進歩を策するに由なかりしなり。是を以て男は直輸出貿易の必要を唱へ、生産者の知識を進め商權を恢復して商品に當然の價格を得せしめんが爲め、先づ其實行方法として帝國銀行の設立、貿易會社の新設、及び生産者の團結等三項を擧げて之を唱導せり。惟ふに海外貿易を振興せしめんとせば貿易業者及び生産者を保護して之に利便を授くるの要あり

男乃ち海外の荷爲替竝に内地の荷爲替を保護するの急務なるに着眼し、斡旋奔走最も力め、其結果明治十四年横濱正金銀行の設立を見るに至れり。同銀行の我が海外關係の取引上に於ける地位は更めて架説を要せず、而もこれ男の主張に基けるものなることは當時の關係者にして今現に生存する人士の齊しく認むる所、同行の設立は海外貿易振興策の具體的實行方法として最も重要なものに屬す。其他勸業銀行、農工銀行等の設立に就ても、男は夙に其必要を唱導せり。是等は何れも男の功績中没却すべからざるものと爲す。

園業經營 明治十七年三月、男は興業意見書を草して之を各地方長官に頒ち、次いで各地を巡歴して勤儉貯蓄を力説せり。十九年四月、農商務省所轄兵庫縣下播州葡萄園並に神戸阿利磯園の經營を委託せらる。男乃ち鹿兒島、宮崎、大分、福島等の四縣

下に亘り其所有地を併せて一步園と稱し、神戸に本部を置き各地に支部六個所を設けて園業の經營に従事せり。

市町村是の創唱

男は又國家行政の中樞は地方自治の發達に存し、自治行政の發達は市町村是の確立に俟たざる可らざるを看取し、各地に奔走し有力者を勸説して市町村是の創設實行に力を盡し致々として倦まず。爲めに地方の風俗を改善したる事著大なるものあり。蓋し市町村是は男の作成創唱せし所にして、男が明治十八年に發表したる興業意見書に胚胎するものなり。而して明治二十五年福岡縣浮羽郡長田中慶介氏が之を實踐調査せしことは田中氏の「郡町村是調査の實踐」と題する報告書及永松某氏の「町村是郡是調査實踐錄」に徴して明なり。今日に在りては此語一般に使用せられ、其新熟語たるを怪む者なしと雖も、男の創唱せし當時に在りては、世人皆新なる聽感を

覺えたるものなり。爾來男は全國を八區に劃し、一區内に一ヶ所の優良村を選びて町村是の調査に従はしめ、後、男の首唱に依りて府縣郡町村農會の各地に設置せらるゝや之をして専ら其調査實踐に當らしめ、明治三十六年大阪に於て内國勸業博覽會の開催せられたる際、各郡農會毎に一ヶ村を選定して村是調査の出品を爲さしめ、以て大に之を獎勵す。今や市町村是の制度は地方改善の上に最も有力なる一方法として世間に迎へられ内務省亦力を盡して之を勸説し、全國到る處に其實行を見るに至れり。而も其源に溯れば男に負ふ所洵に大なるものあるを忘る可からず。

産業開發

明治二十二年十二月第一次山縣内閣成り、岩村通俊氏農相となるや翌二十三年一月男は擢んでられて農商務次官に任じ從四位に叙せらる。間もなく農相の更迭に會して元

老院議官に轉じ、同年九月同官の廢止に先だつて貴族院議員に勅選せらる。又此年勅定藍綬褒章を賜うて多年殖産興業に盡瘁せし功勞を表彰せらる。爾來男は一層の熱誠を以て實業界の爲めに畫策する所あり。當時地方實業家は政論に熱狂し、業務を棄て、空談に馳するの傾あり、男之を憂へ「所見」一部を著し時弊を指摘して廣く之を有志に頌ち、爾來資を耗し舌を爛らして産業團體組織の必要を唱導し、産業政策の確立に力め、之が實行を政府及び貴衆兩院に建議すると共に自ら行脚して全國各地に勸説せり。男が不休不倦の努力と誠意とは遂に當業者を動かし、重要輸出品たる製茶の當業者先づ關西茶業會を起し、次いで關東茶業會起り、後、合して日本茶業會なる一大團體成り、斯業の改良販路の擴張を講ず、實に明治二十六年十二月なり。尋いで團體の組織せらるゝもの曰く全國農事會、曰く全國蠶糸會

曰く大日本畜産會、曰く全國酒造聯合會、曰く日本燐寸義會、曰く大日本木臘會、曰く九州炭坑同盟會、曰く大日本商工會、曰く貿易協會、曰く全國果物會、曰く五二會、漆器、陶器、織物、金屬器、紙、蓆、及び雜貨等七品種當業者の團結せる會等あり。是れ皆男が監督指導の下に結合せられたるもの、世人は其一貫の熱誠を嘆美し、男を呼ぶに其名を用ひずして前田五二又は前田行脚と通稱せり。男は又全國を八實業區に分ち、各區に各業團體の大會を開き、更に各區より代表者を出して全國大會を開催し、實業上に關する法規其他の施設につき審議討究を爲さしめ、之を政府に建議し、議會に提案し、己に採擇實施せられたるものも少らず。即ち農會法、蠶種検査法、蠶病豫防法、同業組合法、産業組合法、府縣農事試驗場國庫補助法、耕地區劃整理擴張法、郵便條例中改正、農産物種子交換に付郵稅減却の事、羊毛輸入關稅免除の事、零碎金貯

蓄獎勵の事、蠶糸講習所の設置、生糸検査所の設置、農工銀行の設立等是れなり。其他在官當時内外國博覽會事務官又は審査官として産業を指導獎勵したる功績は又頗る大なるものあり。

産業調査 男は常に唱導に長し、實行力に富みたるのみならず、又調査研究乃至立案等に對しても非凡の智能を有したり。即ち農商務省に在りて或は地方勸業要務十餘件の問題に對する獻身的調査を完成し、或は臨時調査着手の件三ヶ條を伺定し、或は農務、工務、水産、山林の各局に在りて合計壹百拾七冊に亘る大調査を脱稿せるか如き、其絶倫の精力と匪躬の奉公心とは、他者の容易に模倣する能はざる所にして、寔に驚嘆に植すと云ふ可し。

開田疏水事業 男は又自己の持説を實行し主張を貫徹せんとせば勢ひ資金の準備なかる可からざることを痛感せり。乃

ち一は其財源を培養せんか爲め、一は事業經營上の模範を示さんか爲め、地を日向國北諸縣郡に選定し開田疏水工事を起せり。然るに設計に遺算あり、天災亦屢至りし爲め、工事豫定の如く進捗せず、爲めに男は私財を盡して之に傾注し、其餘累は延いて晩年に及び、男か公共の爲めに活動するの力を殺きたること蓋し鮮少にあらざるなり。然れ共地方民は爲めに非常の惠澤を受け、瘠地變して沃野となり、一村の富は著しく増進せり。續いて男の計畫に倣ひ開田を企畫する者少からず、地方廳亦縣營として開田せしもの既に數百千町歩に及べりと云ふ。男自らは失敗を感じたるか如しと雖も、地方を潤し國家に貢獻せる所少しと云ふ可からず。

歐米差遣 男は歐米に差遣せらるること前後八回、或は英佛に使し、或は露國に趨き、其間知見を廣めて我か實業家を警醒し

國産を彼地に紹介して輸出振興の根基を培ひ、去來萬里の波濤を蹴破して倦むことを知らず。曾て米國に製茶輸入關稅引上の議起るや急遽渡米して當局要路と會見し、折衝大に努めて之か緩和の策を講じたるか如きは尙世人の記憶に新なる所なるへし。晩年男は自ら回顧して左の述懐を録せり。

五十三年間に八たびの洋行

八たび行年は七十又五つ元氣の外はゼロとこそ知れ

大正九年二月歸朝

正名

官 歴 男の後半生は専ら民間産業界の先覺指導者として其生を畢りたりと雖も、其前半生に於ては官歴亦頗る裕かなり即ち夙に佛國公使館付二等書記生を奉し、次いて勸業寮御用掛となり、勸農局出仕仰付けられ、三田育種場長を命せられ、十一年佛國巴里萬國大博覽會には事務官長として派遣せられたるこ

とは既に述べたるか如し。男は更に内務大藏各省御用掛を命せられ、十三年總領事に任し、十四年大藏大書記官より農商務大書記官に轉し、次いて文部省御用掛を兼ね、廿一年山梨縣知事となり、翌年農商務省工務局長に轉して全農務局長を兼任せり。此年勳四等に叙せられ、更に東京農林學校長を兼任し、廿三年一月進んで農商務次官に任し、從四位に叙せられ、間もなく元老院議員に轉し、全年九月勅選せられて貴族院議員に列す。三十年貴族院議員を辭し、廿七年再び貴族院議員に勅選せられ、次いて從三位に陞叙し、大正五年勳三等を賜ふ。

授 爵 男や五十餘年一日の如く公に私に念々國富の増進に努め終始經世の業に従ふ、實に無冠の農商務大臣たり。男の手に成れる直輸出貿易意見一斑、興業意見、農事調査所見、産業、歐州視察等の諸著述に徴するに往々先人未發の卓見あり。之を

行ふや不屈不撓、熱誠一貫して渝ることなし。其化導經綸は今日に及んで着々有形の實績を現はし、翕然として我が産業界の興隆するを見る。千載一遇の大戦に際し、我が實業界をして應機活躍克く異常の發展を遂けしめたる所以の者、其の根源を温ぬれば男の功績多きに居るを信せずんはあらず。然るに大正十年八月、病みて福岡病院に入り、全十一日遂に易簀す、享年七十六歳。其胸底尙幾多の畫策を存し、自ら私に棹尾の一振を期待したるも果さずして逝く。男の遺憾察すべく、國家の損失惜みても餘りあり。病氣危篤の報天聽に達するや、畏くも多年の功績を思召され、特に華族に列し、男爵授與の殊命を賜ひ、正三位勳二等に陞叙せらる。逝いて尙餘榮ありと謂ふべし。

附 録

前田男の晩年は寧ろ不遇落魄、社會は動もすれば斯の經世の勇士を忘れんとするの狀ありしが、一度其易簀を傳ふるや、世人は今更に男が濟民の鴻業を仰ぎ、其提掖の輕からざるを感じ、其風徳を欽頌して已まざるものあり。乃ち故人を追悼し、記念せんとする計畫は全國所在に起り、或は法要を營み、或は記念會を催し、或は建碑を企て、故人の功績を永久に傳へんとす。斯の如きは社稷の爲めに七十年を捧げ、國家民生あるを知つて、己れ有るを知らざりし偉傑に酬ゆる當然の所以にして、又頌徳敬慕の至情に出づ。茲に大阪に於ける追悼法會と京都に於ける記念碑建設計畫とを附記して跋文に代ふ。

記念碑建設計畫

京都は前田男が心血を注ぎたる五二會の發祥地にして夤緣頗る深く、今日知名の士にして男の誘掖推挽を受けたる者尠からず。されば男の易箚を聞くや衆咸な哀惜措かず、有志胥謀り記念碑を京都に建設して故人の事蹟を竹帛と共に永く後世に傳へんとの議あり。該舉を傳聞せる者、營に京都の人士のみならず東京、大阪、其他各地の名士にして之を賛する者踵を接し、特に書を寄せて之が實行を希求激勵する者もあり。乃ち京都の若林知事、馬淵市長、内貴甚三郎、東京の高橋是清子、武井守正男、平山成信、淺野總一郎、大阪の愛甲兼達、横濱の大谷嘉兵衛、名古屋の早川龍介、鹿兒島の玉利喜造博士、其他各地有力縉紳合せて六十餘名發起者となり、故男爵前田翁建碑會を組織して、其事業を果

さんとす。本計畫の最初は故人の銅像を建設せんとするに在りしも、銅像は之を好まずとの故男爵の遺言を遵奉し、單に記念碑のみを建設するに止むる事とせり。碑面には男の影像を彫り、富岡鐵齊氏より生前の男に贈りたる七言詩と共に事蹟の要目を併刻し、之を知恩院山門附近に建設せんとするものなり。惟ふに知恩院山門は五二會發會式舉行の場所、建碑の完成を見れば蓋世の英魂は殊に此地を照鑑せん。

追悼會次第

男爵前田正名翁の我國實業界の先覺者として、提撕誘掖の功績顯著なる事は茲に絮説を須たず。大阪に於て翁の功績を仰ぐもの恩眷を蒙りたるもの相謀り、追悼會を營みて故翁の遺芳を追懷せんとするの議あり、今西林三郎、稻畑勝太郎、林市藏、愛甲

兼達の四氏發起人總代となり、發起人として伊藤佐助、岩井勝次郎、石井勝次郎、新田長次郎、土居剛吉郎、岡島千代造、渡邊榮次、片岡長信、玉手弘通、津田勝五郎、永田仁助、村山龍平、栗本勇之助、山中直七、山口貴雄、八木福松、松方正雄、古川貞之輔、近藤喜祿、安住伊三郎、佐多愛彦、島德藏、島田孫市、平賀義美、樋口彦右工門、本山彦一、森平兵衛、森下博の諸氏の快諾を得、大正十年十月二十日午後三時四天王寺本坊に於て之を執行す。東京より遺族總代として特に故翁の男正次氏臨場せられ、吉田大僧正導師となりて法會を嚴修したる後發起人總代今西林三郎氏の悼詞、大阪府知事池松時和氏の追懷談、愛甲兼達氏の故翁履歷朗讀、大阪貿易語學校長佐藤一造氏の悼詞ありて一般會者參拜す。當日少雨ありしも故翁を追慕せる來會者三百餘、敬虔嚴肅の裡に終了せしは事務の實際に當りし下名幹事等の甚だ本懐とする所なり。茲に故翁

の事蹟概略の印行せらるゝに際し、追悼會の次第を略記すると爾り。

大正十一年七月

故前田男爵追悼會幹事

岡島千代造
古川貞之輔
安住伊三郎
樋口彦右工門

大正十一年九月五日印刷
大正十一年九月二十日發行

【非 香 品】

大阪市東區淡路町二丁目二十三番地
(十五銀行內)

編纂兼
發行印刷者

本 間 恒 治

印刷所

大阪市南區安堂寺橋邊一丁目
濱 田 印 刷 所

電話號碼 八三九〇番
三三九一番

11
593

終

